

〔PBLの風と土 第36回〕

誰かに<行くんですか?>と言われたら

山口 洋典 (立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長)

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学(AAU)で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でのPBL(Problem-Based Learning)の導入で知られており、現地から本連載を始めました。

連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにAAU以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題し、8年目からは再び筆者の教育実践を紹介中です。

1. それぞれにとっての「あの日」

1.17、10.23、3.11、これらは単なる日付ではなく、阪神・淡路大震災、新潟県中越地震、東日本大震災の発災日である。同じように、9.11という数字は、アメリカ同時多発テロを想起させる特別な記号となった。本来、数字は無機質であるが、日付に集合的な記憶が刻まれた瞬間、魂を揺さぶる道具になる。例えば、9.11の追悼集会で朗読された詩「[最後だとわかっていたら](#)」は、インターネットを通じて日本にも広く共有され、書籍化もなされた([マレック, 2007](#))。さらに、この詩は2017年、つまり6年目の3.11に、盛岡商工会議所など139社が連携して岩手日報の朝刊やテレビCMとYouTubeで紹介され、3月11日をすべての人が「[大切な人を想う日](#)」にしようと呼びかけられた¹⁾。このように、詩は追悼の場を越え、あの日
の悲しみに思いを馳せる手がかりとして人々のあいだに響いていった。その結果、2021年2月17日には3月11日が「東日本大震災津波を語り継ぐ日」として岩手県の条例で制定されるに至った。災害は明日も同じ日常が続かないことを私たちに否応なく突きつけると同時に、わずかな時間で日常を突然奪われた人々にどう寄り添い、支えることができるのかを問いかけてくる。

筆者にとって1.17は、研究人生の原点でもある。本連載の第29回などで触れているとおり、筆者は阪神・淡路大震災の際、学生ボランティアとして現地に向かった。当時は土木工学を専

攻していた筆者の周辺では、復興とは目に見える世界、とりわけインフラの復旧や再建にあると捉えられる傾向にあった。しかし、被災された方々との対話を重ねるなかで、地図に描ける世界だけでは復興は完結しないことに気づかされた。失われたのは道路や建物だけではなく、関係や時間や、未来の約束だったからである。その経験を言葉にできるようになるまでには時間が必要だった。転機となったのが、後に師となる渥美公秀の著作『ボランティアの知』である。「緊急救援活動は、ジャズのような即興である」([渥美, 2001, p.31](#))という比喩は、支援とは計画の遂行ではなく、関係のなかで立ち上がる応答であることを示していた。ここから筆者は、社会心理学、とりわけグループ・ダイナミクスへと専門を移すことになった。

災害支援はしばしば「災害支援サイクル」によって説明される。図1のとおり、救急・救命

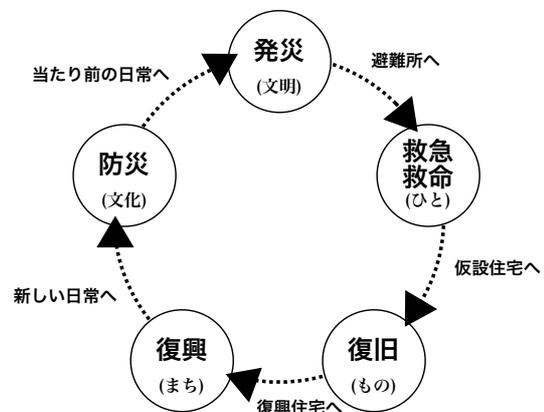


図1：災害支援サイクル(筆者作成)
([全国社会福祉協議会全国ボランティア活動振興センター, 2006](#)をもとに、特に各ステップ間に場所を加筆・修正)

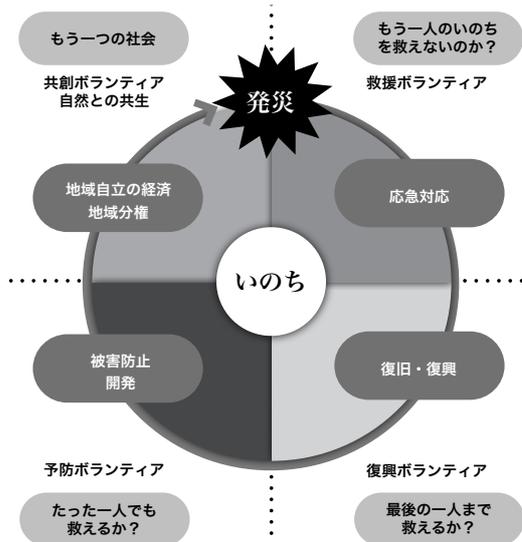


図2：減災サイクル (村井, 2011, p.160)

期、復旧期、復興期、防災期と段階的に整理する枠組みだが、現実には、その境界は明確ではない。被災された方々は、避難所、仮設住宅、復興住宅へと生活の場を移しながら、仕事や人間関係を再編していく。その時間の流れのなかで、支援のかたちもまた変わらざるを得ない。だからこそ、外部者に求められるのは効率的な一回性の支援よりも、細くとも長く関わり続ける姿勢ではなからうか。少なくともワンショットの支援や学習プログラムでは、被災地を題材として消費してしまう危うさを常にはらんでいる。そのため、支援する／されるという固定的な関係を越え、時間を共有することができるかどうか、そこに小さな、しかし譲れないこだわりを抱き続けてきた。

そこで36回目となる今回は、[前回](#)の結語で予告したとおり、2024年に令和6年能登半島地震が発生した「その日」に現地に行くということの意味を考えてみたい。これまでも1.17に神戸市中央区の東遊園地に、10.23に小千谷市塩谷集落に、3.11に宮城県気仙沼市や福島県楡葉町に、そして本連載[第32回](#)でも紹介したとおり、2025年の1.1には七尾市田鶴浜地区に足を運んできたが、筆者のそうした振る舞いを知る人々の中から「また行くんですか?」と訊ねられることがある。そこには「危なくないのか」「迷惑にならないのか」「当事者でもないのに不謹慎ではないか」など、いくつもの含意がある。しかし、被災していなくとも、復興に向けて時間や空間を共有してきた者として、特別な日を

現地で丁寧に過ごしたいという素朴な思いがある。むしろ、その日を共に過ごすことこそが、「細くとも長く」関わるという姿勢の具体化なのではないか。そう考えながら、2026年1月1日を迎えた。本稿では、七尾市田鶴浜地区における「1.1」の前後の動きを紹介してみたい。

2. 集いたい人と集わない人への尊重

2025年および2026年の1月1日、七尾市田鶴浜地区では、「[たつるはま未来会議](#)」の主催により「たつるはまのつどい」と称する追悼の集いが開催されている。たつるはま未来会議は、令和6年能登半島地震後の地域のあり方を住民自身が構想する場として、2024年11月6日に「田鶴浜で未来を考える会（仮）」として発足し、同月22日に現在の名称へ改称された団体である。ただし、たつるはま未来会議は地区内外の動きが複数絡み合う中で設立されたため、以下に設立に至る流れを整理しておく。

たつるはま未来会議の設立の背景には、石川県および七尾市が復興計画の策定を進めていたという事情がある。七尾市では市全域の復興計画の策定が進み、地区別計画の検討も視野に入っていた。そこで、田鶴浜地区では2022年3月に策定された5カ年の「田鶴浜地区地域づくり計画」の見直し時期を迎えていたこともあり、次期の地域づくり計画の検討を視野に入れ、田鶴浜地区地域づくり協議会により2024年10月12日に「田鶴浜復興会議（仮称）準備会」が開催された。この準備会および11月2日の第2回会合を経る過程で、アンケート結果の読み解きを行った11月1日の事前協議において、外部支援者も含めた「復興会議」と「未来を考える会」とを統合することが望ましいのではないかと意見が出された。

筆者も外部支援者の一人として田鶴浜復興会議のメンバーへと呼びかけられ、両会議の一本化に賛成の立場を取った。こうした議論を経て、11月6日の考える会に続き、11月22日に通算第2回の両会議を「第2回たつるはま未来会議」として開催するに至った。すなわち同会議は、「復興に正解はない」という前提のもと、震災復興と地域振興を住民自らが模索する場として整えられてきた。

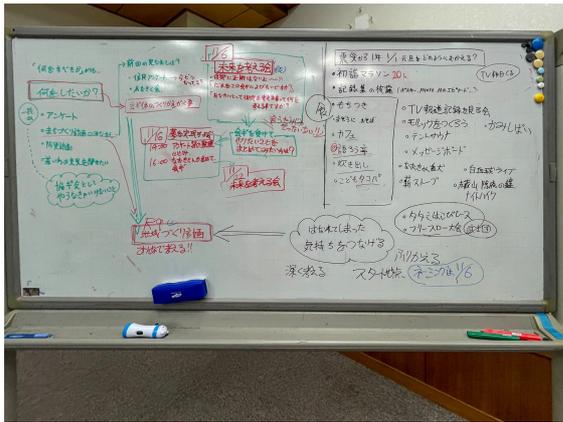


写真1：元旦の迎え方は（2024年11月2日、筆者撮影）

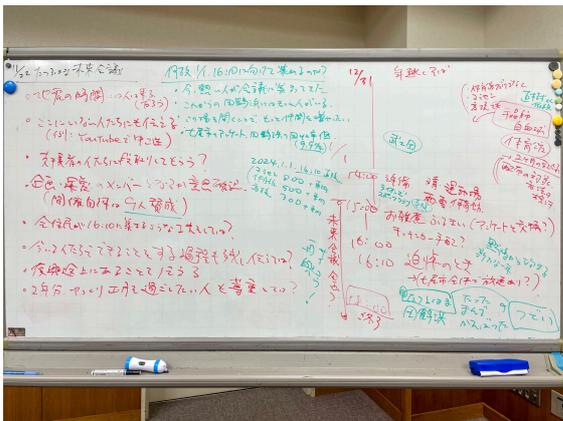


写真2：正月を尊重（2024年11月22日、筆者撮影）



写真3：会議の様子（2024年11月22日、筆者撮影）

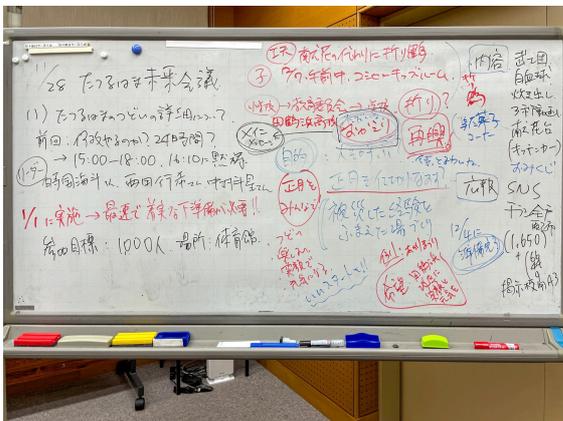


写真4：折り鶴で祈りを（2024年11月28日、筆者撮影）

このように、たつるはま未来会議は「復興会議」と「考える会」との合流のなかで設立されたが、その最初の具体的な営みは、1.1を迎える追悼行事「たつるはまのつどい」の企画であった。ここには「考える会」では議論に留まらず、それぞれが思い描く未来を実現することに取り組む「夢を実現する会」が2024年11月16日に開催されたことが背景にある。加えて、「考える会」と「夢を実現する会」の前、11月2日の「復興会議」では、令和6年能登半島地震以前の田鶴浜ではどのように1月1日を迎えていたかについて議論が及んでいた。そこでは、田鶴浜ではかつて「初詣マラソン」が行われていたことが確認され、その流れのもとで発災1年を迎える「その日」はどう迎えるのがいいか、逆にどのような迎え方は避けたいかが語り合われた。

「たつるはまのつどい」の骨格が定まったのが2024年11月22日の第2回会議であった。そこでは、「今、熱い人が会議に集まってきた」「これからの田鶴浜にはもっと人がいるはずだ」「こういう場を開くことで、もっと仲間を増やしたい」といった声が交わされた。さらに、「七尾市のアンケートは田鶴浜地区の回収率が低い（9.9%）」という事実も共有された。こうした議論を受け、会場に集えない人にもYouTubeライブで配信すること、全戸配布で参加を呼びかけること、一方で2年分ゆっくり正月を過ごしたい人の意思も尊重すること、これらを体現する場を設けることにした。

そして、11月28日のたつるはま未来会議では、被災した経験を踏まえた場づくりを通じて田鶴浜地区に笑顔と元気をもたらせるよう、16:10に黙祷を捧げること、正月を仕切り直してみんなで過ごすこと、駄菓子コーナーやキッチンカーやおみくじなど、こどもたちや家族が楽しめるようにすること、雨天でも内容の変更を必要としない田鶴浜体育館内で開催することが定まった。その際、11月22日の段階では前夜に年越し蕎麦を、当日はお雑煮を振る舞う、というアイデアも出ていたものの、前夜からの企画は運営側にも負担が大きく、お雑煮には喉に詰まらせることが危惧された²⁾。そこで、つきたてのお餅を餡子ときな粉で振る舞うことにな



図3：「たつるはまのつどい」チラシ（表・裏）

り、田鶴浜ライオンズクラブの奉仕で提供されることになった。そして、2025年の最大の工夫は、多くの住民が祈りを捧げることができるよう、生花による献花や、体育館ゆえに裸火の使用が難しいために蝋燭での献灯ではなく、地名の田鶴浜になぞらえて折り鶴を張り巡らせた「[折り鶴タワー](#)」を会場に設置することにした。その準備のため、田鶴浜地区コミュニティセンターのキッズルームに集うこどもたちに、また教育委員会を通じて田鶴浜小学校の児童たちに趣旨を説明し、協力を得ることとなった。

3. 建具の街・田鶴浜として復興推進へ

2回目の1.1となる2026年の「たつるはまのつどい」では、前年に設置した「折り鶴タワー」に代わって、590個の井桁状のパーツで能登半島をかたどった組子細工を作り上げるという企画が軸に据えられた。また、昨年度は追悼式典での黙祷を終えた後には多くの方が帰宅されたことから、交流企画などは追悼式典の前に配置することとし、開会を1時間早めて14時に設定した。前年度に引き続き、田鶴浜ライオンズクラブの奉仕により、400食分の餅つきが振る舞われた。

たつるはま未来会議の組子細工への着目は、第2回たつるはまのつどいに限らない。2025年3月に田鶴浜地域づくり協議会の呼びかけで開催された「[七尾市戦略的復興プラン](#)」の読み解き会（3月13日）と「復興アイデア」知恵絞り会（3月25日）に、たつるはま未来会議のメンバーが複数参加したことで、田鶴浜の地域資源である建具に焦点を当てることの意義が再確認された。3月25日には短い時間の中でも「シン・建具ものがたり」と題するアイデアをまと



図4：「第2回たつるはまのつどい」チラシ（表・裏）

め、その内容をもとに、クラウドファンディングサービス「READYFOR」にて、2025年6月30日から9月28日まで、「[建具のチカラで町づくり！歴史と文化を継いで](#)」が展開された。このクラウドファンディングでは、建具の街・田鶴浜のシンボルロードづくりの契機とするため、のと鉄道の田鶴浜駅ホームにかかる跨線橋を組子細工で装飾する費用を募ることとした。その結果、8月9日に当初目標額100万円を達成し、明治25年に宮大工が建てた古民家を、ゆるやかに集える交流サロンへと再生することを目指すセカンドゴールを設定した。最終的には合計で97人から2,364,000円の支援を得た。

このクラウドファンディングにより、たつるはま未来会議と田鶴浜の建具職人の方との関係が深まり、第2回たつるはまのつどいにて、参加者と共に組子細工で能登半島を浮かび上げようという企画が形になった。当日は約500人の参加により、参加者がそれぞれ能登の復興への思いを込めて組み上げた組子細工が追悼式典の開始までに仕上げられた。この組子細工と共に集合写真も撮影され、復興への願いを共有することになった。

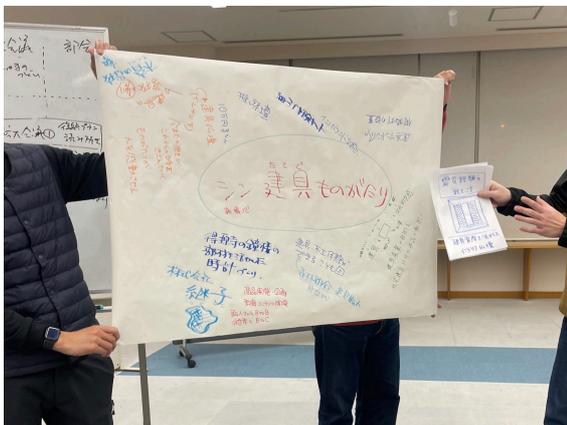


写真5：シン・建具ものがたり（2025年3月25日、筆者撮影）



写真6：組子細工制作
(2026年1月1日、筆者撮影)



写真7：組子と集合写真
(2026年1月1日、筆者撮影)



写真8：小学生の夢と未来
(2026年1月1日、筆者撮影)



写真9：跨線橋の装飾
(2025年12月24日、筆者撮影)

なお、第1回のたつるはまのつどいでは、事前に折り鶴を折ることで地域のこどもたちの積極的な参加を得ていたものの、第2回では組子細工を会場で制作することになったため、別の形で小学生の参加を促すことにした。結果として、追悼式典の前に田鶴浜小学校の協力を得て「子供たちの夢や未来を聞こう」というトークセッションを設け、話題提供を行った5人の小学生が黙祷を前に代表献花を行うこととした。また、前述のクラウドファンディングで掲げた駅舎装飾が12月24日に実施された。当日は地元田鶴浜高等学校に加え、立命館守山高等学校の生徒も参加し、田鶴浜の地域資源への関心を喚起する機会となった。

4. 行く場所からおすすめ場所へ

今回は、「また行く」先である七尾市田鶴浜地区における1.1の営みを、2025年・2026年に開催された「たつるはまのつどい」の開催に至る背景と当日の様子を通して紹介した。特に第2回の開催では、田鶴浜の地域資源である建具に着目した企画が多面的に展開されたことで、災害支援サイクルで言えば、徐々に復興期へと移行していることも感じ取っていただけたのではなかろうか。また、本稿を通して筆者の現場との向き合い方の一端が伝わるならば幸いである。

筆者が田鶴浜に通い続けるようになったのは、大学時代からの友人が令和6年能登半島地震の発災時に七尾市能登島地区に居住していたことがきっかけである。JR七尾線が七尾駅まで運転再開となって間もない2024年1月27日から29日にかけて彼を訪ね、「春休みに入る大学生たちが支援に入ることができそうな場所を見立ててほしい」と相談した。

複数の場所を回るなかで、1月28日15時過ぎに避難所となっていた田鶴浜体育館を訪れ、世話人の一人で後にたつるはま未来会議代表とな

る山本直樹氏を紹介された。懇談ののち支援受け入れの合意に至り、2月2日から学生が駅伝のように交代しながら支援をつなぐ「能登ボランティア駅伝プロジェクト」を開始した。

「能登ボランティア駅伝プロジェクト」では計29日間にわたり、学生34名が延べ141人日、教員5名が延べ38人日の活動を行った。そのうちの一人が、2025年12月24日の田鶴浜駅装飾にサポーターとして参加した。今回、その経験について実名での紹介を許可いただいた手記が寄せられたので、以下に掲載する。

2025年12月田鶴浜地域において、田鶴浜高等学校と立命館守山高等学校の[交流プログラム](#)に、私は学生サポーターとして参加した。

その中で、両校の高校生たちが徐々に関係を広げていく様子を間近で見ることができた。

当初、高校生たちはざこちない様子で、言葉も少なかった。しかし被災地の現状や活動の意味を知った後、各活動の場面では積極的なやりとりが見られるようになった。学校や地域、自分自身の事などについて教え合い、最後には名前を呼び合う仲にまで発展した生徒もいた。そこでは被災経験の有無に固定された関係性はなく、ささやかな会話の中で関係を育む様子があった。

後日、キャンパスプラザ京都で行われた、[防災活動を共有し交流する場](#)にも参加した。

学生や企業、地域の方々が集まり、私は能登での活動を自分の言葉で共有する機会をいただいた。ここでは「自らの声」で語ることの重要性を実感した。体系的な知識の共有だけでなく、各自の目線や実感を持ち寄り語り合う時間は、自分にはない考えや視点に触れる機会となった。また、自分自身の経験を実際に言葉にする過程は、体験を一度きりで終わらせず、次に生かすために磨き直す作業であるとも感じた。

この経験から、「ボランティアは行って終わりじゃない」とも感じた。伝えること、支えること、つなげること、そして関係が続いていくことなど、参加後にもできる関わり方がある。共有の相手は、まずは身近な家族でもよい。その輪は、同じ大学の学生、別のコミュニティ、地域の人へと広げていくことができる。見聞きし語り合うことは、地道だが人の手でしかできない支援の形だと感じる。

今回の経験から、防災やボランティアの現場には、関係性に囚われない軽やかさと、その継続によって生まれる重厚さの双方を感じた。今後も今回のような経験を活かし、現場に足を運び、見て得た感覚を言葉にして磨き続けながら、思考の基礎体力を鍛えていきたい。

(栗 和奏・立命館大学産業学部4回生)

この手記に記された言葉は、筆者自身がこれまで関心を寄せてきた災害復興論とも響き合うものであった。想起されたのは、宮本 (2015,

【引用文献】

- 渥美公秀. 2001. ボランティアの知：実践としてのボランティア研究. 大阪大学出版会
- マレック・ノーマ・コーネット、佐川睦(訳). 最後までわかっていたなら. サンクチュアリ出版
- 全国社会福祉協議会全国ボランティア活動振興センター (編). 2006. 被災者中心の災害ボランティアセンターとするために：災害ボランティアセンターコーディネーター研修プログラム開発委員会報告書. 全国社会福祉協議会全国ボランティア活動振興センター
- 宮本匠. 2015. 災害復興における「めざす」かかわりと「すぞす」かかわり：東日本大震災の復興曲線インタビューから. 質的心理学研究(14) 6-18.
- 宮本匠. 2024. 「みんな」って誰？：災間と過疎をのびのび生きる. 世界思想社.
- 村井雅清. 2011. 災害ボランティアの心構え. ソフトバンク.

【注】

¹ すべての人が「大切な人を想う日に」と呼びかけられたこのキャンペーンについて、本稿執筆時点（2026年2月28日）で、2017年から2025年までのアーカイブが特設サイト <https://www.iwate-np.co.jp/content/taisetunahito-omouhi/> で閲覧可能である。2017年には、マレックの詩に「明日が来るのは、当たり前ではない。」と添えられた。2018年には詩の紹介と条例制定への署名を呼びかけるが始まると共に、各年ごとにテーマを据えて「大切な人を想う」よう訴えている。2018年には大槌町の「風の電話」での取材内容を、2019年には復元納棺師の笹原留以子さんによるイラストと文章を、2020年には震災で亡くなった方々の「日常の言葉。でも、最後の言葉。」を、2021年には「復興10年の曲」プロジェクトを、2022年には「2011年3月11日の岩手日報テレビ欄」の紹介と岩手県警のホームページでの47名の「身元不明のご遺体情報」へのアクセスを、2023年には岩手県内でいまだ23万5000点以上の東日本大震災拾得物があることを、そして2024年には陸前高田市の漂流ポストを紹介し「ごめんね」を言うに日にも、と呼びかけられた。ちなみに、マレックによる詩の最後の連には「『ごめんね』や『許してね』や『ありがとう』や『気にしないで』を／伝える時を持とう」という部分がある。これらを受け、2025年には7年間10タイプにわたる広告を教材化され「最後までわかっていたなら 教育プログラム」の提供と、言えなかった「ごめんね」を書き込めるサイト「ごめんねポスト」が開設された。

² 11月22日の時点でのプログラム案は、18:30 オープニング／19:00 フリースロー大会・畳運びレース／20:00 赤提灯語ろう亭オープン／21:00 赤蔵山ナイトハイク出発／22:00 年越し蕎麦／23:00 余興（紙芝居、手師白血球）／0:00 年越しカウントダウン・（テントサウナ？）／1:00 TV報道を見る会／6:00 餅つき／7:00 お雑煮振る舞い・初日の出／8:00 フリースロー大会（金沢武士団）・初詣マラソン／11:00 餅つき／13:00 モルック／15:00 フリースロー大会／16:10 黙禱／18:30 クロージング・「ありがとう」の記録配布、そして通し企画でカフェ、たこ焼きパーティーとされていた。

2024) が提示する「めざす」関わりと「すぞす」関わりの区別である。宮本 (2024) は、保育実践の分析を手がかりに、災害復興支援を再考し、「互いの存在を無根拠に肯定しあうことで、自分を無力な存在としてうけとめる」関係性の意義を指摘している (p.67)。そして2026年度、筆者は再び立命館大学の学外研究制度を利用し、京都大学防災研究所の私学研修員として1年間田鶴浜に身を置き、滞在型のフィールドワークを行うことを決めた。前回の学外研究を機に始まった本連載も、新たな展開を迎えることとなる。阪神・淡路大震災以来、多くのまちに関わってきた筆者であるが、改めて能登の現在に触れながら、前掲の手記に記された「軽やかさ」と「重厚さ」に向き合いたい。これからは「行く」場所としてではなく、「すぞす」場所として田鶴浜に身を置き、現場で見て、感じ、言葉にしたことを重ねていく。その蓄積のなかから、復興と支援の現在形を問い直していきたい。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)